

まちの時間をつくる場所

Keywords

高齢者 造船所 記憶
災害対策 地域拠点



DZ22208 和田 尚佑

1. はじめに

近年、各地で整備が進む津波避難センターなどの防災施設は、災害時の安全を確保する重要な拠点である一方で、平常時には地域住民の生活から切り離された存在となっている場合が多い。避難施設が「非常時のための箱」ととどまってしまうことで、日常的な関わりが生まれず、地域に根づいた防災意識の形成にもつながりにくい現状がある。

また、そうした施設はしばしば、その土地が持つ歴史的な記憶や産業の痕跡、地域固有の風景といった文化的文脈を反映しておらず、場所のアイデンティティを失わせてしまうことも少なくない。

本計画では、災害時に人々を守るだけでなく、平常時には地域の暮らしや交流の場として機能し、さらに土地の記憶や歴史を継承する建築のあり方を探る。防災と日常、記憶と現在をつなぐことで、地域に寄り添う新たな避難拠点の可能性を提示することを目的とする。

2. 研究背景

2.1 新山本造船所の解体

今年母親の実家に帰ったときに新山本造船所の解体工事が始まっていることを知った。それを見てこの土地の歴史と実態に興味を持って研究を行った。

2.2 高齢者の暮らしとコミュニティの課題

現在の高齢者向け政策や支援施策は、身体的に比較的に元氣な層むけであり、体が十分に動かせない高齢者にとっては十分ではない。このような高齢者にとって、自宅は長年住み慣れた最も安心できる場所であり、外出の目的がほぼ「買い物」に限られてしまっている実態がある。自宅を基点としながらも、しぜんに人と関われる場の設計が求められている。

2.3 土地の記憶の消滅

近年、老朽化した建物の解体と空き地化が進み、地域の歴史的建築や風景が急速に失われつつある。かつての産業や暮らしの記憶を継承しつつ、新たな時代のコミュニティ形成を促す建築的アプローチが求められている。

3. 設計目的

本設計は、高知県高知市種崎地区の新山本造船所跡地を対象に、新しい津波避難センターの設計と住民たちの居場所創出を通じて、将来的な地域復興の拠点となる建築を提案する。造船業によって栄えた地域の歴史や風土を読み解きながら、現在および将来にわたり、地域と人の関係をつなぎ直す空間のあり方を探る。

4. 対象敷地

4.1 敷地概要

敷地は、私の祖父母の家がある高知県高知市種崎4、5、6丁目を対象とする。このエリアは大部分が海に囲まれた半島状の平地地域である。約60年前までは5つの造船所があり船員や大工でにぎわっていた。また人気観光地である桂浜も近い。



4.2 敷地分析

(1) 住民たちの暮らし

高齢者がほとんどを占める種崎地区。高齢である住民は家にこもりテレビを一日中みて買い物のときのみ外出するような生活をしている。これは長い間住んできた自宅が彼らにとって一番落ち着く場所であり外出する目的が買い物しかないためと考えられる。

(2) 生活施設

「愛ちゃんストア」と呼ばれる八百屋が住民たちの主な食材調達場所である。常連さんたちの憩いの場所であり先代の店主から受け継がれてきた愛着のある場所である。しかし生ものやコメ、飲み物などは手に入らないためそ

れを買うときは住民はタクシーやバスで大型のスーパーに行く。

(3) 山本造船所跡地

かつて栄えていた山本造船所の跡地。現在は全く機能していない。すでにクレーンや宿舍は取り壊されている。また現在残っている建物も地震による倒壊を防ぐため取り壊されることが決まっている。

(4) 長浜種崎間県営渡船

種崎と長浜の間を運行する無料の渡船。20分から一時間おきに運行し学生が自転車で自走して乗船したりお遍路道として利用されている。

4.3 歴史

(1) 1964年まで

江戸時代から種崎では木船づくりが長く行われてきた。6区と5区に集中して平田造船、大東造船、土佐造船、今井造船、山本造船が並んでいた。種崎4区から西は「種崎銀座」と呼ばれてたほどにぎわい飲み屋なども多かった。5区の少し広い家は1階と2階をあけて船員が宿泊できる船宿になっていた。

(2) 種崎半島切り取り

港口を広げるために種崎半島の切り取りが1966年に行われた。それによって山本造船以外が種崎から移転した。

(3) 倒産

1973年の石油ショックによって山本造船所が倒産する。その後種崎銀座は急速にすたれていく。

5. プログラム

(1) 銭湯

高齢の住民たちは自分たちの家が一番快適だと思っている。そして友人と会うときはその人の家に直接行く。みんなの家のようなオープンスペースを作っても結局家にこもってしまうのではないかな。そこで自宅にいることを肯定しつつ日常生活の「寄り道」となれるような銭湯を作る。銭湯であれば自分が行きたいときに行けるしふとした交流も生まれやすい。

(2) 惣菜屋とレストラン

現在、住民たちにとって食料調達の困難さが課題であることが分かった。スーパーのような買い物施設を作ると愛ちゃんストアと役割が重複してしまう。総菜屋とイートインスペースを作ることによって買い物ついでの交流を生む。体が十分に動かず料理をすることが困難な人にとっても便利だろう。

(3) 新たな海上ネットワーク

現在高知市内から桂浜までを結ぶ浦戸湾クルーズ船が運航している。このクルーズ船は浦戸湾内をめぐり自然が作った地形や桂浜の歴史などを紹介している。このクルーズの停泊地を新たに設定し地域の活性化と種崎の歴史を知ってもらう機会とする。加えて現在の長浜種崎渡

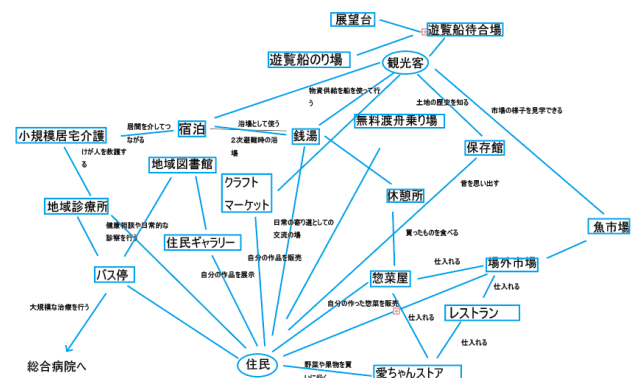
船の停泊地を移動させ造船所跡地が再び生活の拠点となるようにする。

(4) 診療所

現在は種崎周辺には高齢の住民たちが徒歩圏内でアクセスできる医療施設がなく住民たちは一日に数本しかないバスで総合病院にアクセスしなければならない。そこで地域住民に最も身近な医療機関で日常的な病気や健康相談に応じ住民たちが気軽に相談できる診療所。ここで診察を受けた後は1階のバス停で総合病院に向かう。

(5) 保存館

造船所のドッグ内部の雰囲気やレールを近くで味わうことのできる公園のような場所。住民たちは昔を思い出し、観光客はこの土地の歴史を知ることができる。



参考文献

1) 高知銀行

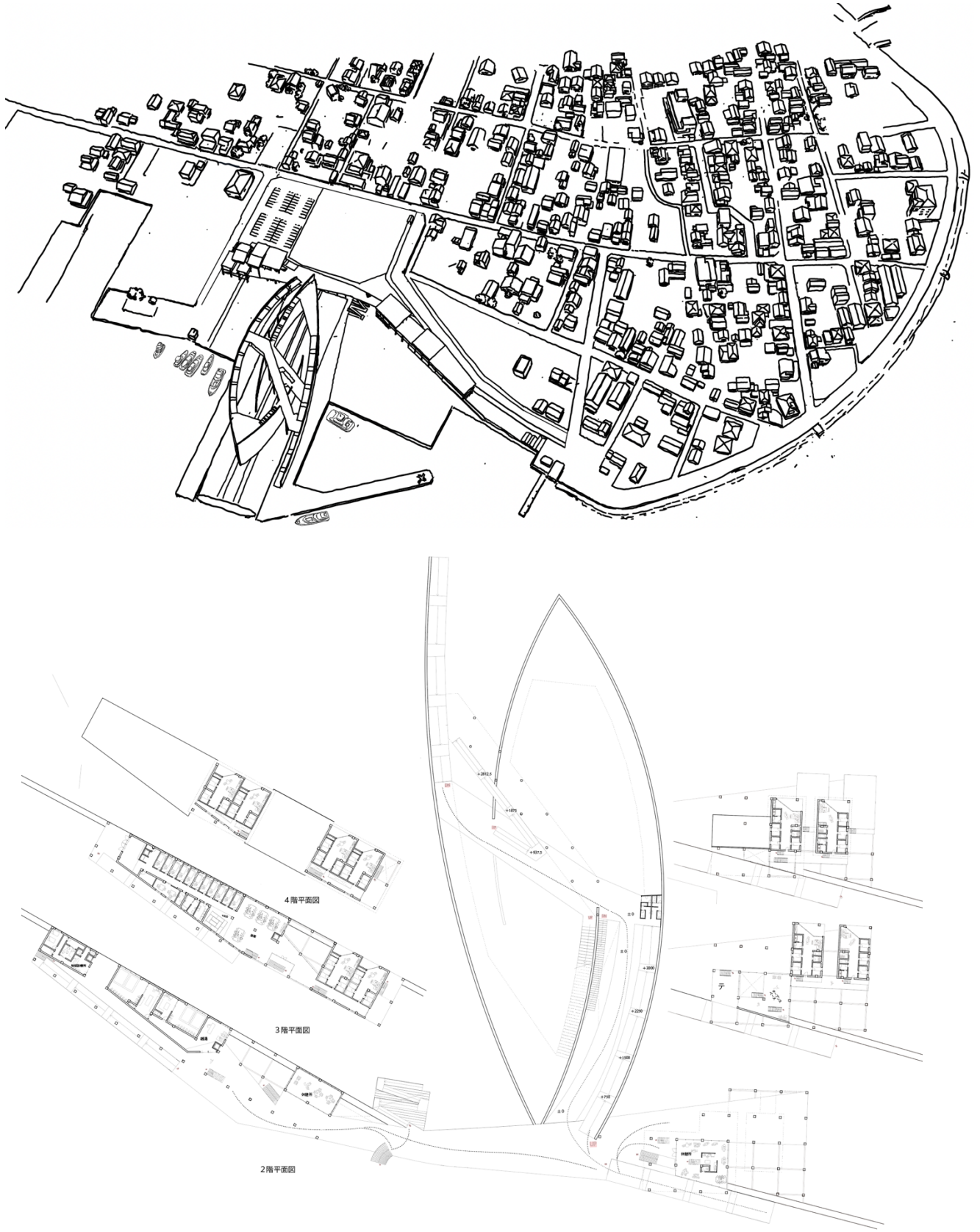
<https://www.kochi-bank.co.jp/yosakoi-okyaku/blog/?p=16836>

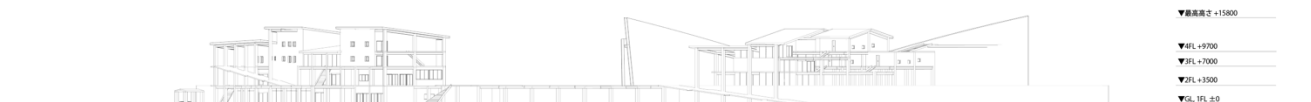
2) art-tourism.jp <https://www.art-tourism.jp/article/kitakagaya>

3) ふるさと三里、1999年1月発行

4) 三里のことども 1981年11月9日発行

本計画は高知市種崎地区の新山本造船所跡地を対象に、津波避難センターを平常時にも地域に開かれた拠点として再構築するものである。高齢化が進み、外出機会が限られた住民の暮らしに寄り添いながら、銭湯や惣菜屋、診療所など日常的に利用される機能を組み込むことで自然な交流を生む場をつくる。また、造船業によって形成されてきた土地の記憶を継承し、防災と日常、過去と現在をつなぐ「まちの時間」を生み出す建築を提案する。





東側立面図 1/300



南側立面図 1/300

